

自己陶醉

we-are-reds

私が生まれてから今年で25年目である、一生が100年だとすれば四半世紀経とうとしている。

私が生まれたのは寒い地域のいたって普通の家庭である、いわゆるブルジョワと呼ばれる家庭だ。決して貧しくはなかった、腹いっぱい食わせてもらったし塾も大学進学もさせてもらった。そんな私の幼児期～小学時代の微かに残る記憶と当時の心境と苦悩を書きたいと思う。

幼児期とはいっても記憶にあるのは幼稚園時代である。当時から家庭と社会との間に大きな壁を感じていた、自己を表現することが不可能に近かった。ネットスラングで言えばコミ障といったところだろうか、家族や己が心を許した相手としかまともに会話ができなかった。まともどころか一言も話せない相手もいたくらいなのだ。対話することが好きな人間にとってこの苦悩をわかっていただけないと思う、私の母親ですら理解に乏しく母親に対して憎しみがあったのは否定できない。そんな幼稚園生活を送っていた私は幼稚園の演劇発表会でセリフを与えられたが何も言えず馴染みに助けられた、今でも忘れられない苦い経験である。

そんな私は小学生になる、もちろん性格というものは変えることが難しく、むしろひどくなった。小学時代校内では誰とも話していない。今考えるとギネスもらえるのでは！？と思うくらいである。当時も自己表現することが困難だった、対話しないということが不便だということもわかっていたが、不便以上に対話や自己表現に対する強いストレス嫌悪感があった、これは決して自分の声がコンプレックスだったからではない。このような人間性のため当時はいびられていた、辛くて仕方なく泣くことも多々あった。しかし家庭で苦悩を話すことはなかった、何故かプライドが許さなかった。そんなやるせない小学時代であった。

中学時代

この時代は誰しもが迷う時期ではある。自分自身とは何ぞや、自分を知り自分が何ができて何ができないのか将来はどの道を進むのか、現実を突きつけられる時代だった。当時の劣等感と現実逃避は否めない、ただ勉強に関してはある時から猛勉強した、人生で一番勉強したのはこの時だったと思う。そんな中学時代は将来設計がどうしても立てることができなかった、やりたいことが見つけられなかった、将来についても嘘並べてごまかしていた。勿論当時も会話などまともにはできるわけでもなく、危機感とやるせなさは払拭できないでいた。会話できないというのは社会における死を表すことは頭では理解していた、しかし体が言うことをきかない。将来への不安、劣等感と自分自身に対する憤りはあった、自分を好きになれなかった。他者には甘えだ逃げだと思われていたはずだ、しかし自分自身と向き合って何とかしなければならぬと自分と葛藤していたのは事実であり、今考えてもこの苦悩は他者には理解できないと思う。また、この多感な時期は恋愛に関しても深く考える時期であるはずだ、未だに恋人がいない私は当時から恋愛は他人事だと思っていた、自分が恋人と歩むというのを想像できないでいる、かといって異性に興味がないわけではない、勿論性欲もある。

今考えること

なぜこんなことを書こうかと思ったのは自分自身を見つめる機会を作ろうと欲っていた。他者に対して自分の悩みをわかってもらおうなんて思わないし、共感をしてもらわなくても構わない。しかし、他者とコミュニケーションとらないと生きていけない、仕事にしても持ちつ持たれつ、どこかで誰かに支えられているのは否めないと実感した。コミュニケーションで自分を知ってもらい、助けてもらう時は助けてもらいまたその逆も、会話は安心感をもたせ親しみを生み出す重要なイベントなのだと思う、こういう話をすると宗教チックだと言われるかもしれないが、どこかで自分を変えなきゃいけないと思ってる人もいるはずだ、私だってできるものなら他者と関わらず生きていきたい。コミ障は甘えだというのはその通りかもしれない。